

道 標

どうひょう
d o h y o

年間特集「おしえ」

第三回・芸を語る

豊竹 若太夫さん

連載

あなたのいのちの物語
伝承を科学する
道しるべ

姐御とやくざの悲しみと志
能楽の大きなリズムがもつ意味
カミさまとホトケさま

2025 夏季号





文楽の太夫が語る浄瑠璃の義太夫節は、昔から日本音楽の「邦楽の司」と言われています。僕らが先輩、師匠から教わるいろいろな「教え」、それは「型」なんです。江戸時代から始まり300年あまりの積み重ね、蓄積。それがすべて型に集約されています。だんだんと高度になり、もう微に入り細に入りすごい複雑。でもある意味その分、合理性があるんですよ。とにかくその型を覚えるのが大変なんです。

たとえば語る「詞」ってあるでしょ

う、それは単なる詞ではないんです。詞に抑揚、節がついている、詞に音程があるんです。それも全て決まっている。侍、町人、お姫様、お爺さん、お婆さん、お侍でも善人悪人。お婆さんでもええお婆さん、悪いお婆さんもあるでしょう、それぞれに全部音程が決まっている。それをみんな覚えるんです。

今はテープとか様々な音源がありますね。最初はその音源を何度も聞いてみます。でも音源を聞いただけでは無理なんです。採れないんですよ、実際、目の前で稽古してもらわないと。間の取り方や音の抑揚や強弱、緩急のつけ方とか教わらなきゃいけない細かいところがあるわけです。

最初はまあちよつと、5分、10分のもんから始まります。まず師匠から言われた教えの通りマネする訳です。「この詞をここへ置いたらちやうがな、ここや」「ここちやう、ずれたでアカン」「これももつと軽くやらなあかんがな」と。あれやこれやで50年ぐらいやってたら何かこれでいいかなという感じになってくる。昨日よりも今日、あつ、これだったなという気づきみたいな形で生ま

れてくる。

今のこの現代、合理性を追求して、できるだけ短い時間で多くを体得したいと思うでしょう。そういう部分で言うところの現代ではないです。だからすぐ辞める人も多い。とにかく時間をかけなきゃあかんですわ。そんな急にはできません、苔が生えるように何度も何度もやって覚えるんです。いつも弟子に言います「お前らな、どっかで飲食してきてもな、帰ったら絶対10分でも勉強せよ。」と。人間って怠惰ですからね、しんどいかもしれないけどやってるとやはり「ちよつと、ああ、こここいうやな」というトコが必ず出てくる。僕だってお客さんと食事して帰ってきて眠かっても、必ず師匠の音源を聴くようにしています。10分それが30分、1時間ぐらいになるんですよ。やってたら目が覚めてくるんです。ほんと不思議！僕は入門して58年になりますけどね、今やっと何とか型が解ってきた気がします。そんなもんです。

皆さんよく個性と言うでしょう。

でも最初は個性なんて要らないんです。かえって邪魔！型も分かたないのに個性といってもダメなんです。でもね、50年経ったら逆に個性がなきゃあきまへん。最後はその人の持つている人間性とか人生経験とか、何ていうかな芸魂。最後はそれで勝負します。そりゃ先輩師匠方はすごいと思っています。僕の祖父とか僕の師匠や先輩の方が全然うまいなと思ってるんです。僕らみんな敬服しながらやってきてるんです。

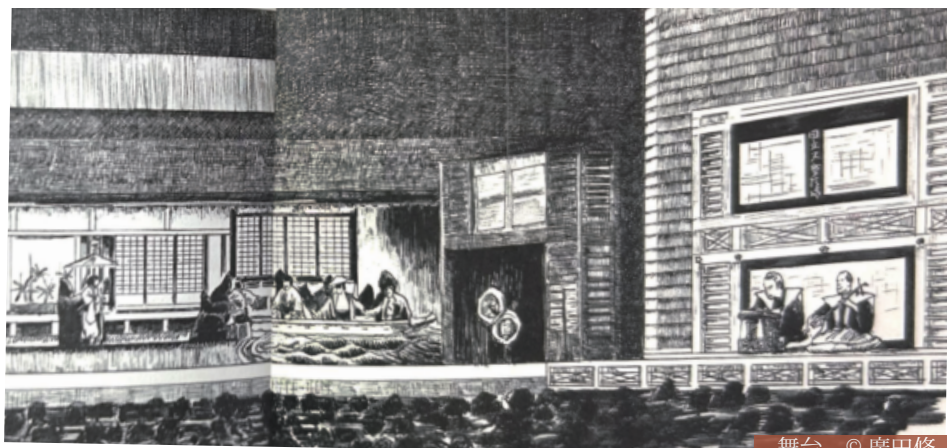
素人の語りとプロ、それは全然違いますね。声の発声の仕方が違います。息が大事なんです。太夫が語る声は声やないんです。息なんです。太夫はそれを体得し声を作るのに



師匠から教わるいろいろな「教え」

それは「型」なんです。

20年ぐらいかかります。喉を使わないで息を全て肚から発声します。そしてその息に性根を込める、渾身の力を込めて。そして軽くやらなくちゃならないんです。声が体から放たれ、勝手に物語が語られていく。そうすると言葉が生きてきて、お客さんの心をつかむことができるんで



舞台 © 廣田修

喜怒哀楽を超えた別な次元の世界に皆さんを連れていく

す。軽く語らなければお客さんは安心して聞いてられません。

小さい時みんな考えますでしょう、死んだらどんなのかとかね。不安じゃないですか、そんなこと考

えたら人間世界の喜怒哀楽どころじゃない。僕はクリスチャンやから天国へ行くと思ってますけど（笑）

よく浄瑠璃は情を語るとか言われますけどね、情なんて人間みんな持っていると思いますよ。子供が死んだらかわいそうだし、親しくしたら泣くでしょう。でもみんな悲しい悲しいと言いながらもお客さんはどこか心が動かされ安心させられる部分があるでしょう。それは喜怒哀楽を超えた安らぎの世界に來てるからに違いないんです。だからその感動というのはすごく居心地がいい。

僕らは喜怒哀楽という内容を餌にしながらも、心は自分の思いを超えたところに飛んでいく。そして僕らが生きているこの疑問だらけの現実世界を離れ、お客さんを別な次元の処（ところ）にもっていく。だからある意味、

そこに快感があると思ってるんですね。お客さんと一緒にそのエクスタシーの世界へ行かんとあかん訳です。僕らも語っていないながらも、それに気が付いてなきやダメなんです。次元が違う私を超えた世界、まさにシュールレアリズムですね。

死んでもこんなだけ忠を尽くしたら来世で認められ、幸せやという来世思考があります。これが現代とはまったく違う。例えば女房と子供が身代わりになったとします。おじいさんやったら、孫が可愛いと思うのが普通。ところがその時は孫とか嫁とかよりも、殿様が大事、主従関係の方が上なんです。僕は今の人間ですから、自分の嫁と子供を身代わりにする、そりゃ考えられない。けど、やっぱり当時はそうやねんと思つて、ほんまにそのおじいさんの気持ちになつて語ります。そしてそれを語ることによって次元が違うものになる、昇華されていくと思うんです。相反するものが両立していくっていうアンビバレンス。まさに人間の心

の本当のありさまでですね。

僕いつも思うんです。先生って先に生まれるって書きますけど、先に生まれただけだと。だから僕は別に弟子よりも偉いと思つてないですよ、偉そうにはしてませんが（笑）。「先に生まれて、いろんな師匠、先輩方から受け継いだものをみんなに教えてるだけ、手渡すだけやで」と。弟子たちにはいつもそう言ってるんです。

僕は20才で入門して今、78才になりましたけどね。あつという間でもまだ僕は100才まで語ろうと思つてますから、80才過ぎてからが勝負やなと思つています。はよ、80才になりたい。（笑）

十一代豊竹若太夫（とよたけわかたう）

昭和42年三代竹本春子太夫入門、祖父十代豊竹若太夫（人間国宝）の幼名豊竹英太夫を名乗る。昭和44年四代竹本越路太夫の弟子となる。平成29年六代豊竹呂太夫を襲名。令和6年十一代目豊竹若太夫を襲名。「ゴスペル・イン・文楽」に代表される新作にも取り組み、能・狂言・落語・クラシック・オペラ・現代詩などのコラボにも挑戦するなど幅広く活躍。

Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

29話目

「姐御とやくざの悲しみと志」

長谷川伸

「一本刀土俵入」

股旅物で知られる長谷川伸の戯曲で、今も歌舞伎の演目として頻繁に演じられる。常陸の取手の利根川べりが舞台だ。安孫子屋という茶屋の表で、土地の顔役波二里儀十の身内船戸の弥八が暴れている。横綱を志すが親方に見放された取裡的（最下級の相撲取り）の茂兵衛が通りかかり、弥八にからまれる。その様子を二階からみていた安孫子屋の酌婦お蔭は、弥八を口であしらい茂兵衛を助ける。空腹で力が出ない茂兵衛だが、弥八の胸に頭突きを入れて倒し、自分も座り込んでしまう。

そこでも二四歳前後の茂平とお蔭の語り合いとなる。茂兵衛は上州駒形（現在は前橋市）出身だが父親は二〇年前に出ていってしまった。母は故郷のお墓の中にいるという。お蔭が言う。「取裡的さん。お前さんもお母さんが恋しいのだね

え」。茂兵衛が応じる。「姐さんのお母さんも死んでしまったのか」。

お蔭は「あたしのお袋は生きてるのさ」、だが遠いから様子がわからぬという。母親がいる故郷は越中の山の中という、「おらちゃ友達や、さたね（菜種）の花よ、ハア、どこいしょのしょ」と歌う。風の盆で名高い越中八尾のおわら節だ。今は「キタサノサードッコイサーノサ」と合いの手を入れるが、土俵入りの掛け声とつながるようでもある。

茂兵衛の事情を聞いたお蔭は、巾着に櫛や簪まで入れて投げ下し茂兵衛を励ます。茂兵衛はこの親切に深く心を動かされ、必ず横綱になる、それまでは「駒形茂兵衛の名で通します」という。「それだとあたし直ぐわかつていいねえ。じゃあお行き、左様なら」とお蔭。振り返り振り返りしながら去っていく茂兵衛。

それから一〇年程経ち、お蔭は取手のいなかに住み、一人娘のお君と二人で船印彫師の夫辰三郎の帰りを待ちながら飴売りをして細々と暮している。何年も家によりつかなかつた辰三郎だが、長い間苦勞をか

けた妻子のためにと、波二里儀十の鉄火場でいかさま賭博をし、見つかったと金をつかんで逃げ出した。ちょうどその時、安孫子屋界限を人を尋ね歩いていたのは、相撲取りは諦め渡世人となった茂兵衛だ。追われる辰三郎がわが家に帰りつくと、すでに儀十の手は廻っている。そこへ飛びこんできた茂兵衛は、お蔭に金包みを渡す。お蔭はすぐには思いつけないが、しばらくしてやっと茂兵衛だとわかる。

今や渡世人となった茂兵衛は強い。最初は棒一本で闘うが、その棒を捨てて相撲取りの力技で儀十二味を投げ伏せ、当身で気絶させる。



当座はしのげる。茂兵衛に促され、お蔭と辰三郎が名残を惜しんで去っていく。「お行きなさんせ早いところ。仲よく丈夫でおくらしなさんせ」と三人家族を見送り、以下の最後のセリフが語られる。

「ああお蔭さん、棒つ切れを振り廻してする茂兵衛の、これが、十年前に、櫛、簪、巾着ぐるみ、意を見を貰った姐さんに、せめて、見て貰う駒形の、しがねえ姿の、横綱の土俵入りでござんす」。

お蔭と茂兵衛の双方が、弱さに苦しみ、癒しがたい悲しみを抱きつつ、尊ぶべき何かを見失わない、その生きざまに心動かされる物語だ。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、龍谷大学・大正大学客員教授、曹洞宗総合研究センター講師。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）『いのちを、つくって、もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語ではどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承を科学

する

能楽の大きなリズムがもつ意味

現代、能の上演に要する時間は一時間か一時間半程度である。老女を主役とする作品だと、その時間は二時間をゆうに超えるが、そもそも能楽が大成された室町時代、上演に要する時間は現在のおよそ半分であった。

天女を主人公とする〈羽衣〉の上演には80分かかるが、室町中期頃には40分で演じられていたことになる。現代の時間に慣れていると想像がつかないが、便利なことにYouTubeだと、二倍速での再生が可能である。私自身が作成したYouTube「能〈羽衣〉楽譜付」を二倍速で見てみたが、実はまったく違和感がなかった。天女が漁夫に向かつて「のう、その衣は此方にて候」と呼びかけるセリフは、二倍速のほうがむしろ自然に聞こえる。ゆつくりしたテンポの代名詞であるような「序之舞」の箇所もより軽快に進むが、だからといって能楽独自の緊張感が失われるわけでもない。一見をお勧めしたい。

上演時間が今のように長くなった

理由はふつう、江戸時代に能楽が幕府の儀式音曲になったことに求められている。なるほどそれは大きい圧力だったはずだが、そういった外圧だけではなく、演技者が自ら、ゆつくり演技することに意味を感じ、それを目指した面もあるのではなからうか。

〈卒塔婆小町〉は老女物の人気曲である。九十九才の小野小町が杖をつきながら登場する場面の登場楽は、老女らしさを出すべく



卒塔婆小町 (耕漁 画「井筒」『能楽図絵』2より)
国立国会図書館ウェブサイト
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1881031/1/15>

ゆつくり演奏されるが、緊張感に満ち満ちている。鼓がポンと二拍打ち、次の一拍を打つまでの間隔はおよそ5秒である。拍と拍との間には「ヨォー、ホォー」などの長い掛け声があるが、5秒間隔の打音同士を連続的な流れとして聴かせるのは、並大抵の技ではない。5秒間隔とは、たとえると野球やゴルフの球が弧を描いて百メートル以上先に着地するまでの滞空時間の大きさだ。

そのテンポに合わせて歩行する小野小町の一歩一歩の間隔も大きい。過去の映像で確認すると、その間隔はおおよそ4秒である。私たちの普段の一歩二歩の間隔が0.5秒だとすれば、その間隔が4秒になる生き物として、われわれの八倍の身長の人を想像せねばならない。身長が十五メートルほどの巨人の歩幅を、二メートル以下のひとりの能役者が表

現するのだ。その間隔の歩みにどれだけ緊張と抑制された力が必要か、ご自身でも歩いて実験していただきたい。ちなみに、ゆつくりした二音二音、一歩二歩をひとつの流れとして表現するには、「序破急」つまり物事が自然に加速していく原理を、体内にうまく取り込むことが必須となる。

六百年にわたる伝承の中で能楽は、独自の大きなリズムを生み出した。それにより能楽はリアリズムの演劇をはるかに超え、自然としての人間の生命や魂をそのまま、あるいは象徴的に表現する芸術となった。無論、その大きなリズムを感知するには、われわれ鑑賞者側にも、大きな呼吸をして心をしずめて集中する覚悟が必要となるだろう。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。

◆ カミさまとホトケさま

「お天道さま」という言葉を耳にしなくなつて久しく感ずる。「お日さまを拝むなど真宗には関係ない」といわれるかも知れないが、チヨット現代社会を見渡してもらいたい。

浄土真宗の教えを「宗教」という山に喩えてみると、それは富士山の頂上にあたるといえる。富士山の美しさは雪をいただいたく山頂に目がゆく。ただ、その美しさはひろびろとした裾野があつてのことである。裾野のない富士山は考えられない。浄土真宗という「富士山」も裾野を考えねばと思う。

そこで「カミ」。漢字で「神」と書く。「示」に「申」で「神」となる。「示」は祀るを意味する。「申」は「甩」が元だそうだが意味は「いなづま」「電」である。太古の人は突然と鳴り響くいなづまに驚異を感じて、畏敬の対象とした。自然の力を崇め、大いなる恩恵と脅威を感じた。ご利益と崇りである。恵みの太陽も日照りが続く「荒ぶる神」となり、さまざまな災害を誘発し人びとを苦しめる。そこに敬いと恐れと感謝がある。そこに慎みが生まれる。この自然現象の神格を「天神」と崇めた。おなじカミで「祇」と書いてカミと読む。

「氏」は族をあらわす。それは地上における先祖である。自らの先祖を「祇」とまつ。いのちを繋ぎ恵み育ててくれた先祖に対する感謝、そして「族の安寧と繁栄の守護を願う。それを「地祇」と敬った。

科学知識のなかつた時代。そこでは理解できない現象はすべて、「神・祇」（カミ）の「恵み」「崇り」と感受された。科学の発展と知識の普及は、人から「恵み」と「崇り」を感受する能力を失わしめた。ほとんどの現象の原因が説明できる。原因がわかれば対応策がたち不安が払拭される。いかなる災害であつても起こることを願う者はいない。しかし、その原因に恐怖を感じることはなくなった。それだけに傲慢になった。

いま、人びとが一番に不安と感ずるものは、今の安泰が何時までつづくだろうかである。ハッキリ言う「カネ」が続くかどうかであらう。敬いと恐れの対象が「カミ」から「カネ」にシフトしている。

この現実状況の中で、恵みはあつても崇りのない、先祖までもないホトケさまが、人びとから崇められる地位を奪回するにはどうすればよいのだろうか。裾野を視野に入れた山の全景を見る目を養わなければと感ずる。

編集後記

今では当たり前となつてきているが、車の出現は都市の風景や暮らしを一変させたという。そして今は一人に一台！スマホである。電車に乗つてみるとほぼ全員がスマホの画面を眺めている時代である。「スマート、インテリジェンス、コスパ」「賢い、知識、費用対効果」今の時代の象徴の言葉である。その生活スタイルが知らず知らずのうちに私たちの心情や価値感を形作っていく。

今回、特集『おしえ』の豊竹若太夫師匠、「とにかく型を覚える！時間をかけなきゃあかん」とおっしゃる。それは頭でつちの現代の価値感とは合わないかもしれない。『運』『鈍』『根』という言葉、「運は鈍でなければつかめない。利口ぶつてチヨコマカすると運は逃げてしまう。鈍を守るには根がなければならぬ。」古河財閥創業者、古河市兵衛はそう言っていたという。しっかりと根が張つてなくては何事も成就しない。天も味方してくれない。おそらく「芸の道」「経営の道」、あらゆる「道」を歩むものにとつての経験的真理なのであらう。

そして親鸞は自らを愚か者、「愚禿」と称した。逆説的に聞こえるかもしれないが、それこそ真の『賢者』と呼べるものではなからうか。 合掌

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ <http://ntbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)

表紙の絵 朝の祈り 東本願寺大谷婦人会蔵

陽が落ちて夜になり、次の朝がきて陽が昇る。何の不思議もないけれど。

昔、太陽が沈むと、その太陽はどこに行くのだらうかと思われ、翌日に昇る太陽は別物と思われていた。そのために「日想観」や「西方極楽浄土」という考えが生まれた。朝、太陽が昇るとその恵みに自然と手を合わせた。インドのバラモン教では自然の万物が神であつた。天界では太陽、月、星々。空界では風や雷、雨。地上界では土地や水、草木など。それぞれ優しい時も荒れ狂う時も多々あるが、神として崇める。地動説が解つても自然の摂理にはあがなえない。自然を敬い朝夕の太陽に合掌し、一日に感謝し希望を願うことは素直な人間の心ではないだろうか。

畠中光享（はたなか こうきょう）

日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。

行信教校校長、大阪教区東住吉組西光寺住職。